

令和4年8月

第1回白山市総合教育会議

会 議 録

白 山 市

令和4年度 第1回 白山市総合教育会議

日 時 令和4年8月31日(水) 午前10時

場 所 白山市役所4階 402会議室

1 開 会

2 市長あいさつ

3 協議事項

(1) 今後の中学校の部活動について

(2) 公民館のコミュニティセンターへの移行に伴う社会教育の在り方について

(3) その他

4 閉 会

出席委員

白山市長	山 田 憲 昭
白山市教育長	田 村 敏 和
白山市教育長職務代理者	竹 内 千恵子
白山市教育委員	北 田 朋 幸
白山市教育委員	小 寺 正 彦
白山市教育委員	安 川 薫

欠席委員

白山市教育委員	尾 張 勝 也
---------	---------

事務局出席職員

教育部長	山 内 満 弘
教育総務課長	米 木 伸 一
学校教育課長	東 野 央
学校指導課長	東海林 幸 男
生涯学習課長	北 嶋 篤
子ども総合相談室長	川 上 照 子
松任図書館長	三 谷 哲 史
教育総務課長補佐	杉 本 俊 彦
教育総務課係長	絹 川 幸 代
観光文化スポーツ部長	山 下 浩 雅
文化振興課長	山 口 昭 恵
スポーツ課長	滝 田 秀 樹
協働推進課長	横 川 元 子

傍聴者 1名

開会 午前 10時00分

○教育総務課長（米木 伸一）

定刻になりましたので、ただいまより令和4年度第1回白山市総合教育会議を開催いたします。本日は尾張委員が欠席という連絡が入っております。

◎市長挨拶

○教育総務課長（米木 伸一）

本日の会議につきましては、非公開とする内容はないと考えられますので、原則どおり本日の会議を公開したいと思いますが、よろしいでしょうか。

○構成員

異議なし

○教育総務課長（米木 伸一）

それでは公開といたします。

開会にあたりまして、山田市長からご挨拶をお願いしたいと存じます。よろしく願いいたします。

○市長（山田 憲昭）

本日は、令和4年度第1回白山市総合教育会議の開催にあたり、委員の皆様方にはお忙しい中ご出席をいただき、誠にありがとうございます。また、皆様方には、平素から白山市の教育の充実、発展のために、ご尽力を賜っておりますことを心から感謝申し上げます。

はじめに、8月4日の豪雨災害についてであります。白山ろく、鶴来地域の家屋等で、土砂の流入や床上浸水、床下浸水、断水が発生するなどその被害は甚大なものであります。今回は、幸いにも夏休み期間でありましたので、児童、生徒に直接の影響はありませんでしたが、近年の気象状況を鑑みれば、今後また、いつ何時、どんな災害が

起こるか解らないことから、児童、生徒の安全・安心を最優先に対策を講じてまいりたいと思っております。

また、新型コロナウイルス感染症につきましても、感染が急拡大しております。新学期が始まったところではありますが、引き続き、熱中症等にも十分に留意しながら、感染防止対策の徹底をお願いしたいと思っております。

さて、本日の会議のテーマの一つ目は、「今後の中学校の部活動について」であります。文科省より、令和5年度から、中学校の土日祝日の部活動を、学校から地域に移行する提案が示されております。部活動の在り方についての改革が急がれていることから、生徒及び指導者にとって、望ましい体制がどうあるべきか意見交換をいただきたいと思えます。また、二つ目の「公民館のコミュニティセンターへの移行に伴う社会教育の在り方について」に関しては、本市において、より幅広い地域活動の拠点づくりを目指し、公民館からコミュニティセンターへの移行に向けて調整を進めているところであり、委員の皆様の忌憚のないご意見をいただきたいと思えます。それでは、どうぞよろしくお願いたします。

○教育総務課長（米木 伸一）

ありがとうございました。

これより協議事項に移りたいと思えます。議事の進行につきましては、主宰者であります市長をお願いしたいと思えます。それでは、市長よろしくお願いたします。

◎協議事項

○市長（山田 憲昭）

それでは、協議事項に入ります。本日の議題は二つあります。

一つ目は、今後の中学校の部活動について、二つ目は、「公民館のコミュニティセンターへの移行に伴う社会教育の在り方について」であります。

まず、協議事項（1）今後の中学校の部活動について事務局より説明をお願いいたします。

○学校指導課長（東海林 幸男）

（資料にて説明）

◎意見交換

○市長（山田 憲昭）

ただ今、事務局からの説明が終わりました。

このことについて、教育委員さんからご意見を伺いながら進めていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。安川委員さんから、お願いします。

○教育委員（安川 薫）

中学校の部活動の目的というふうにとらえた時に、位置付けがどうかということを考えました。学校生活の一部としてあげられるものとしては、心身をリフレッシュする。気分転換をする。それから、同じ部活動に所属する仲間と一緒に活動する。そんな中で、喜びとか悔しい気持ちを共有する。それが生きがいに繋がって、学校生活をはじめ、各自の生活を豊かで充実したものにするということがあるというふうを考えました。最近の様子を見てみますと、指導する側、今でしたら学校や先生と生徒の指導される側との関わりはもちろんあるのですが、そこに保護者の関わり方というのが少し薄いのかなと感じています。働き方改革という言葉がよく聞かれるようになったのですが、同様に、これはもしかしたら主に金銭的などという意味合いが強いのかもしれませんが、保護者負担という言葉もよく聞かれていて、正直それには少し違和感を覚えています。部活動の内容にもよりますが、少し私個人の話をさせてください。2人の子供が吹奏楽部に所属をしていました。長子と次子の時の大きな違いというのがありまして、長子が中学生のころにはなかった部活動の保護者会というものが、次子のころには存在していて、吹奏楽部ですので、コンクールや発表会というのはもともとあるのですが、その保護者会ができたことがきっかけかどうかわかりませんが、学校独自で演奏会という新たな活動が増えました。先生方の異動によって、顧問の先生が変わるということが前提にあるので、こういった活動が、場合によっては保護者会なしでは継続が難しいのではない

かなということを感じました。そして、ちょうど今年それが当たる年だったのですけれども、保護者会として、コロナ禍ということもあって、打ち合わせをする機会がほとんどなく、演奏会の前日、当日以外の運営というのは、なるべく少数で行うことになりました。準備の内容も多岐にわたっていて、これはさすがに学校だけにおまかせすることができるものではないなと強く感じました。先生方とのメールや、直接打ち合わせを重ねている中で、本当に内心は先生方にかかる時間とかプレッシャーとか、あまり使いたくない言葉で、いわゆる負担という部分を気にしながらも、保護者としては裏方として、そういう活動に参加させていただきました。たくさんさせてしまっていつもすみませんというよりも、たくさんしていただいて、いつもありがとうございますというふうに伝える方が、お互いにプラスで、笑顔も増えて、それがモチベーションにもなったかなと、きっと私だけではなく、先生方も思ってくださっていたのではないかと思います。そういう力添えがあったことで、おかげさまで大変すばらしい演奏会に立ち会うことができました。何よりも子どもたちの充実感に満ち溢れた表情がそれを物語っていたと思います。部活動のみならず、子どもに関連することに対して、保護者負担という言葉だけで片付けていいのかなということを確認する機会になりました。部活動の地域移行が段階的に行われるということであれば、学校や地域、各種民間団体だけではなくて、そこに家庭も適所には介入をして、一緒になって汗をかいて、血の通った環境づくり、協働していくことも、子どもたちが安心して部活動に参加することができて、それが心身の健全な育成に繋がっていくのではないかと思います。部活動の地域移行を実現するための課題は、本当に様々あると思いますが、忘れてはいけないのは、あくまでも生徒たちが真ん中にいるということだと思います。子どもたちが中学生として過ごす、たった3年間はその時しかないのです。やってみただけ続きませんでしたというのはあってはならないことです。課題の一つ一つを、学校の実情に合わせてどこまで柔軟に対応していけるのか、そしてそれが持続可能なものであるかということ踏まえて、慎重に進めていただきたいということを願います。私の意見は以上でございます。

○市長(山田 憲昭)

ありがとうございました。小寺委員さんよろしく申し上げます。

○教育委員(小寺 正彦)

私の方からですけれども、文部科学省の発表が2023年度から3年間をめどに、運動部活動を民間移行するというようなことでございます。そこで、令和7年度中に移行を完了することはとても難しいと個人的には思いました。そして、白山市が頑張って先頭を切って進める必要があるかどうかということについて、判断はまた後日すればいいなと思いましたが、ただ、外部人材や地域のスポーツクラブの確保は、早く手をつける方がいいのではないかなと思った次第です。そこで、6項目をまとめてみました。まず1番目ですけれども、民間への移行というのは、学校から部活動をなくし、完全に社会スポーツにしてしまうことを目指すという意味だと考えられますが、学校の部活動を廃止し、その生徒を地域のスポーツクラブにお任せするというのは、現実的ではないと思います。また、実際には学校の部活動は存続させ、外部指導者や民間の力を取り入れることで、教員の負担軽減を図るというものになるのではないかなと思います。地域のスポーツチームが出場する試合を、中体連が運営するのかもしれない問題もあります。中体連が運営する試合は、運動部の顧問の教員代表による、ボランティアの働きにより行われています。教員が関わらずに民間が試合を運営することになると、大変な人件費が必要であるというようなことでございます。2番目に、国の費用負担を求めるというようなことでございますが、国が部活動の民間移行を進める以上は、その費用は国が負担する必要があると思います。このことは市町の教育委員会から、県や国に強く働きかけをするべきであると思っております。3番目に、スポーツ指導のできる教員を外部指導者にとりよるというようなことでございますが、白山市の場合は、スポーツ指導のできる地域人材が豊富でない地域もあります。部活動に熱心な教員を、土日にスポーツ指導者として雇い入れることができたらいいなと思いましたが、任命権者である県教委が、教員の兼業・兼職の制度を考えるように、市から県に強く働きかけるべきではないかなと思った次第でございます。次に4番目でございますが、平日の部活動指導を勤務時間内に終わらせること。まず、そも

そも勤務時間内だけの部活指導をしているなら、教員の負担については、さほど問題ではないのではないかと思います。部活指導中は、明日の授業の準備はできないけれども、教科の授業は、チャイムがなれば確実に終了しています。部活動の終了時間は曖昧です。中学校体育連盟が用意する多くの大会、試合でございますが、勝つことを至上目標として練習をさせる顧問や、頑張りたい生徒が部活動を長時間化しているのではないかなと思ったわけでございます。そこで、学校に部活動を残しながら負担軽減を目指すなら、平日の部活終了時間を守らせて、それ以上の練習は土曜日または日曜日に、民間外部指導者のもとでの練習とするのがよいのではないかなと思いました。次に5番目でございますが、中学校の体育連盟のあり方について少し見直したいと思いました。早くから民間に移行している競技に、水泳部があります。水泳部を設置している学校が減り、水泳をしたい生徒は町のスイミングスクールに通う。しかし、試合は中体連の主催で行われており、スイミングスクールの選手ではなく、所属中学校の生徒として試合に出場することになるので、水泳部のない学校の教員が水泳選手を引率したり、審判をしたりしなければならない。これがどこのところでも現状ではないかなと思ったわけでございます。他の部活動も、民間移行した場合は中体連のあり方が変わらなければ、またこれと同じようなことが拡大されることになるのではないか。それがいいか悪いかはまた判断は別でございますが、それもまた検討の余地があるのではないかなと思います。次に6番目でございます。これは先の話でございますが、県立高校の入試のあり方についても考えました。高校の入学者選抜で調査票に、部活動の活動状況を書かせる欄があったり、活動実績により加点をしたりする制度がありますが、これは必要であるかどうか、私は必要ないと思いましたので、再考することが望ましいのではないかなと思っている次第でございます。以上、まとめた中で、学校で行う部活動が勝利至上主義から脱却すること。そのためには、平日の部活の終了時間を厳守させ、そしてもっと頑張りたい生徒のために、土曜日または日曜日の外部指導者による指導体制を作ることが大事だと思います。中学校、高等学校の部活動は、日本独自のスポーツや文化活動を作り上げ、育ててきたもので、できる限りその良さは残したい。良さを残しながら、行き過ぎた指導をなくし、生徒のスポーツをしたいという要望も叶え

ながら、教員の負担軽減を実現できればいいと思っております。中学生になったら、部活動はどうしよう、何部に入ろうかなと思いつながら、入学してくる中学生の夢は大事にしてあげたいと思います。学校での部活練習は過熱せず、頑張りたい生徒には、土曜または日曜の外部人材のもとでの練習で頑張ってもらうのがいいのではないのでしょうか。運動部活動の指導をする先生の中には、部活指導にやりがいを感じ、非常に熱心に頑張っている方が多くいます。この方々のやる気を無くさせないためにも、土日には教員としてではなく、民間のスポーツ指導者として報酬をもらって、兼業でできるような制度を県の教育委員会が考えてくれることが必要ではないかと思えます。またそうなったら、市の方からも、県教委に働きかけをお願いしたいなと思った次第です。以上でございます。

○市長(山田 憲昭)

ありがとうございました。それでは北田委員お願いします。

○委員(北田 朋幸)

土日のどちらか1日の指導を専門の方々にしてもらうということもありますが、本当は全部変えた方が一番いいのではないのでしょうか。ウィークデーを先生に習って、土曜日に専門の方が来られて、言うことが違うと生徒は迷いますし、まだ段階的なことなのでしょうけれども、少し難しいかなというふうに思います。どの学校も、学校訪問に行くと、知徳体ということで、ものすごく部活を重視しておられる中で、体は本当に体育だけの授業でいいのかということにもなります。やはり生徒指導の先生を見ていると、中学生になると、しっかりした部活の顧問の先生方が生徒指導をしてらっしゃる傾向が多くて、そうなってくると、どうしたものだろうとずっと思っています。それから部活動の顧問として、競技経験や指導経験のない先生には、白山市でアンケートを取って、土曜日に出て部活をしたいという先生と、いや土日は休みたいという先生がどれだけいて、どれだけの指導者が必要かということをもまず調べて、こういうことに関して対応すべきかなと思います。やはり、熱い先生もいらっしゃいますし、そういう先生の意欲をそぐことも駄目かなと思うので、そう

いうところから進めていって、市がそれに対応していく形。今、私たちがこうしていろいろなことを考えていっても、結局は各部活に応じて、それに対応していかなければいけないし、部活の指導にもう応えることができない部活が出てきてしまっただけでは、子どものやりたいというスポーツ、させてあげたいスポーツができなくなってしまうということがあるので、そうではなく、子どもがしたいスポーツをできるような状況を保ってあげたいと思います。以上です。

○市長(山田 憲昭)

ありがとうございました。それでは竹内教育長職務代理をお願いします。

○教育長職務代理者(竹内 千恵子)

学校指導課からの資料でも歴史的な転換期であるということで、私はこれをきちんと生かすべきでないかなと思います。今のままでは、やはり先が見えているというか、あまりにも教員、学校に負担がかかってしまって、果たしてそれが生徒にとっていいのかということと考えたら、やはりここで、これを機会に見直していけばいいのではないかなと思っています。ただ、3年間を改革集中期間というふうにしていますが、やはり地域によって、あるいは文化部、運動部の状況によって、あるいは学校の置かれているところによって、いろいろ条件が違うと思うので、期間にこだわらずに、もう少し柔軟にきちんとしたものをしていただきたいなと思います。こういう過渡期になると、この過渡期に該当する子どもたちに影響が及ぶということがとても大きいのではないかと思います。ゆとり教育があった時はゆとりの学年とか、そういうことがやはりあるので、あまり子どもたちに影響がないような、また学校現場に大きな負荷がかからないような、そういう少し長い目で改革をお願いしたいと思います。これはもともと出てきたのは教員の働き方改革ということです。ですからこの問題が、100%ではないけれども、いい方へ向かうのか、あるいは少子高齢化、人口の減少で、学校として、チームとして出られないと、そういうような地域もこれから増えてくるのではないかと思います。それから、私はやはり保護者や子どもたちも、部活に対しての考え方が多様化しているのではないかなと思います。ですから、今の議論だと何か今の学校にある部を

そのまま土日にうまくできないかなというようなことが、そのベースにあるように思うのですが、やはりこれは歴史的な転換期ということで、本当に子どもたちがこの部活を欲しているのか、必要なのか、あるいは新しいものがないのか、eスポーツがないのか。白山市であれば、ジオパークを学習する学び舎ですか、あれが部活みたいにして、土日で市としてできないのか。そういう子どもたちや保護者のニーズというものを調べていただけるといいかなと思います。それから、世の中も、今までは学校代表で出るので、頑張れ、優勝してこいとか勝ってこいと、勝利至上主義というのでしょうか、それがあったと思うのですが、小学校の柔道が全国大会をやめたというような話があるので、部活に対して、スポーツに対して、競争ばかりではないのだと、先ほどから出ている、心身ともに健康なものでないといけないという、そういうことから、やはり見直しが必要なのではないかなと思っています。基本的には変えなければならぬけれど、問題が多すぎて、スポーツ課から、スポーツ少年団に入っている数が減り、若い指導者を育成しなければならないという反省もある。これからは指導者の問題も出てくるだろうし、会場とか費用とかの問題も出てくるだろうし、部によっては、自分の部でやりたいという生徒の思い、人数が多い部は、学校として出たいという学校の思いもあるだろうし、あともう一つ心配なのは、学校でやっていたときには、管理職の目があるので、体罰ということには学校の目が行き届いていたと思いますけれども、これが学校を離れた、土日になったときには、指導者の方にはその自覚をきちんと持っていたかかないと、またこれは別の問題になるのではないかなと思います。ですから、いろいろ申しあげましたけれども、基本的には、今これを良い機会としてとらえて変えていくべきだろうし、先ほどありましたように、いろんな団体の意見をきちんと聞いて、子どもたち、児童生徒にとって、いい改革になったらいいなというのが私の思いです。以上です。

○市長(山田 憲昭)

ありがとうございました。それでは教育長お願いします。

○教育長（田村 敏和）

先ほど東海林課長からもお話がありましたが、本市では、今後の取り組みとして、関係部署と移行に向けて協議会の準備会を今進めているところであります。課題はいろいろたくさん出てくると思いますけれど、私も今年、全国の都市教育長会議がありまして、そこに参加した折にこの部活動の地域移行の話も出ました。都市教育長会議の代表メンバーも、国の、この移行に伴う会議には参加をし、今いろいろな申し入れもしているところがございます。当然、県の教育委員会連合会としても、そのような話し合いをしていかなければいけないというところで、先ほどお話がありました関係団体または関係機関への申し入れ等をしなればいけないのだろうと思いますけれど、ただそのためには、いろいろな話をしながら、課題をしっかりと明確にしないといけないなということを考えています。そのために石川県では、いくつかの市町で、文化部運動部のモデルとして、今やっておりますので、その状況も確認をして今後に生かしたいなということを考えております。ただ、最終的には、子どもたちにとって、やってみたい活動を選べる環境づくりというのを第1に考えなければいけないということを考えております。今までの例を見ますと、子どもの数が減ってきて、学校で部活動の削減というのもありました。子どもたちはやりたいのだけど、子どもの数も少ない、先生もいないということで部活を減らしますということもあり、子どもたちが落胆するということも、私も何度か見てきました。そう思うと、子どもたちにとってやりたい、やってみたい、そういうものにチャレンジできる環境づくりというのを考えていかないといけないのだろうと。そのためにどんな仕組みがいいのか、それをしっかりと協議していけたらなということを考えています。最近子どもたちの活動を見ていると、いろいろな活動をしています。例えば、踊る方のバレエとか、またはアーティスティックスイミングに関しては、中学校で部活としてやっていませんが、オリンピックに参加した方もこの白山市にはいます。いろんなものにチャレンジできる環境づくりをしてあげないと、子どもにとって満足いったものにならないのかなということを考えています。今回の部活動の改革に関わっては、もう一度言いますが、子どもたちがいろいろやってみたいことにチャレンジできる環境づくりというのをしっかりとやっていかなければいけない。そのため

に、関係機関と協議をしっかりとやっていかなければいけない。先ほど東海林課長、安川委員からもありましたが、PTA、保護者の方のご意見をしっかりと聞き入れてやっていかなければいけないということを思いましたし、今後ともまた皆さんからいろんなご意見いただきながら、取り組んでいきたいと思っております。以上です。

○市長(山田 憲昭)

ありがとうございました。歴史的転換というか、平日は学校の先生がやって、土日はまたかわった人がやる。指導方針が変わったら、子どもたちはとまどうのではないかなと素朴に思います。変わるのなら全部変えないと、一貫性が保たれるのか。指導者と子どもの関係というのは、そんなにうまくいくものなのか。変えるのなら全部変えるぐらいの気持ちでないと、子どもはきつととまどうでしょう。その辺が少し不安なのと、もう一つはアクセスについて、この広い地域の中で子どもたちがそこへ移動する手段というのは、どうあるのかなということ。都会では、塾の先生がもう学校へ入ってくるというような時代でもあって、もう塾の先生に、学校教育の一環の中に入れてもらって、まかせるということもある。そこまでは、今我々のところはないのだろうけれども、積極的に移行しなくてもいいのではないかという声もあるけれども、非常に難しい。遅れた場合どうなるのか、急いだ場合どうなるのか。

○委員(北田 朋幸)

今までは多分、全員部活に入りなさいというような学校の方針があって、こうなってくると、部活に入らなくてもいいよということの中学生に言えるのかどうか。

○市長(山田 憲昭)

極端なことを言うと、平日は学校でやるけれども、土日には行かないということもできるかもしれません。

○委員（北田 朋幸）

今リトルボーイズやシニアを見ていると、平日の月、木だったかは練習で、あと土日の練習は絶対ですというお話を聞いています。

○市長（山田 憲昭）

だから平日、学校でということがなくなりますね。ものすごく曖昧だなという感じがする。指導者によって変わる部分もある。

○教育長（田村 敏和）

指導者がいないから部活がなくなるというのは、子どもたちは本当にかわいそうです。逆をいうと複数校で一つつくれば、顧問は何人かつくのですが、ただ先ほど市長が言われたように、その移動手段とか、練習場所をどうするかとか、例えば吹奏楽も、楽器をどう保管して、そして土日は別のところでやるとなるとどうするか。

○教育委員（安川 薫）

運搬だけでトラックが出動しなければいけないので、とても大変です。

○市長（山田 憲昭）

トラックだけではなく、調律等いろんなこと考えるとそんな簡単に移動もできない。

○教育委員（安川 薫）

運搬だけで数万という費用もかかってきます。

○教育長（田村 敏和）

あんまり慌て過ぎてもいけないけれども、今のうちにやはり課題はきちんと把握しておかないと、急激に変わっていかれると、対応は上手くいかないといけないので。

○市長(山田 憲昭)

安川委員が言うように、保護者は大事だと言えば言うほど、保護者にそれだけ負担がかかってきたら、これも大変です。

○委員(安川 薫)

各家庭で温度差はやはりあります。保護者が一丸となってというわけにはなかなかいかない現状はあります。けれども、一応組織化をしてあったことで、まだ運用のしやすい状態にはあったのかなというのがあります。これは結局組織になった場合に主に活動するのが3年生の保護者というふうになってくるので、今年の使命として、きちんとこの時期にはこういう準備が必要でということ、確実に引き継いでいける状態に作り上げなければいけないということがあります。

○教育長職務代理者(竹内 千恵子)

今のお話をお聞きすると、例えばそういう恵まれたところは別に他のところと一緒にならなくても、自分たちのところでできますよという部、多分、人数もいるし、楽器もわざわざ運搬しなくても今のままでできるんだという学校も出てくるだろうし、やはり本当に、一律に全部をきちんと何かしようというのは厳しいかなと思います。課題の一つです。それから、先ほど市長から指導者の教え方という話がありましたが、これが文化部になると、書道や華道等は流派とかがあって、土日の流派と学校の流派が違うとか、またややこしいことになる。だから学校の方はきちんと勉強を教える。あと放課後は、もう1時間ほど何かやりたいことをして帰るぐらいにしておかないと、この部を土曜日曜と合わせてしようとする、本当に大変なのではないかと私は思います。学校は先生方が責任持てる範囲で、新しい部でやって、土日でしっかりとやっていただくというほうがいいのではないかと思うのですが、それだとやはり、コンクールとか大会があると出られないのでしょうか。

○市長(山田 憲昭)

もう一つ小寺さんから、学校の先生は平日に教えて、土日は兼業にすれば

いいのではないかという話がありましたけれども、このようなことはありなのですか。

○教育長（田村 敏和）

今、それも議論には出ています。要は、土日は先生は勤務ではなくて、地域スポーツ指導者として参加してもらう仕組みです。

○市長（山田 憲昭）

それだと働き方改革にならないのではないか。兼務で、また副業みたいなことになるとややこしい話になる。

○教育委員（小寺 正彦）

私は、教員の負担軽減をどうしたらいいかと思ひまして、ただ提案なのですがけれども、教員の負担軽減を目的にして、部活動の縮減を進めていく、そういう言い方をしたら、保護者から猛反発が出ると思います。生徒の人格形成や体力向上に寄与する活動であることから、これらの部活動のメリットをできるだけ残したいと思った場合、新しい仕組みを取り入れて教員の負担軽減につなげることを考えていかないと、だめなのではないかと思ひました。そうした場合はやはり、先生方には、平日だけというようなことがまず望ましいのではないかなと思ひまして、そのあとの土日は先生が教えるのもいいけれども、手当が必要なのではないかと思ひています。そしてまた、指導ができない先生については外部の指導者を教育委員会で雇い入れてさせるというようなことも必要ではないかなと思ひ、土日は教職別というようなことで考えたらどうかと思ひました。

○市長（山田 憲昭）

その兼業的なものを認めるかどうかということは、ものすごく大きなことと、もう一つは社会的な流れとして、塾というものがもう都会では当たり前になっていると。我々は塾ということは考えていないけれども、学校で教えることと、塾で習うこととは両立しているんだという考え方が、それをこの地方に

置き換えたときに、地方もそれが成り立つのかということになるのではないかという気がします。都市部はもう完全に塾が確立されて、そこへもう行くということになっているところではできるけれども、受け皿がないところにそう簡単にできるのか。そういうのは公立高校含めて、何とか子どもたちがやってこられたのを、そんな感覚で言えば、もう塾、私立に任そうということになっているのではないか。

○委員（北田 朋幸）

多分、高校も私立高校にみんな行きたがるのではないのでしょうか。

○市長（山田 憲昭）

中学も私立の学校が出てくるぐらいだし、そこは受け皿として、私立とか、そういうものができていかないと、この問題は解決しないのではないか。今地方でそんな簡単に私立がどんどんできるということにならないとすると、3年でこんな受け皿はできないという気はします。かわいそうだが結構難しい問題です。

○教育長職務代理人（竹内 千恵子）

3年間で何とか形にしようというところが、厳しいですよ。期限が切られているのは。だからそこは全国市長会でも、期限は決めないでくれとお願いした方がよいのではないのでしょうか。

○市長（山田 憲昭）

本当にこれは、各自治体ごとに出来るかといえば出来ない。与えられた職員からしたら、できないかもしれないけれども、準備はしなければいけない。

○教育長職務代理人（竹内 千恵子）

でも、中途半端なことをして、本当に子どもたちに不利益になったときに無駄になります。

○教育長（田村 敏和）

やりだして、子どもたちに影響が出るようなことになったら、そこが一番怖い。

○教育長職務代理人（竹内 千恵子）

大学入試の英語に民間試験を採用すると言って、学校が準備をして、生徒に英語の試験を受けるんだと言ったら、やりません。大学入試は、2次試験はやはり記述が大事だろう、記述の問題を取り入れますよと言って、いろんな研修会をして準備をしたのに、ちょっと無理ですとなっているように、学校現場に負荷がかかって、そして全く進まなかったという、それだけはないように、もう少し時間をかけてでもいいので、きちんとそれぞれの市、町、県が独自にできるものをやったらいいなと思います。

○委員（北田 朋幸）

基本的に学校と教員と子どもたちの繋がりが大事なので、あまり断ち切られても困るなと思います。

○委員（小寺 正彦）

石川県でモデル校はどこなのですか。

○学校指導課長（東海林 幸男）

能美市がやっていますし、文化部については、金沢の方で全面を引き受けてやっています。あとはほんの一部です。

○委員（小寺 正彦）

能美市がモデル校ですか。

○学校指導課長（東海林 幸男）

能美市では、部活を絞り込んで、その部で集めてやっている。大きなところではあまりやっていません。全国的にはいくつかあります。

○市長(山田 憲昭)

能美市のようにコンパクトなところは、比較的やりやすいでしょう。

○教育長(田村 敏和)

文化部は金沢市がやっています。あと内灘町もしています。

○市長(山田 憲昭)

行政的に問題になるのは、子どもの移動体制というのをしっかりできるのか。これを、行政の範疇の中でやれと言うのか、土日は保護者でやれと言うのか。平日はいわゆる公立、市立の学校であるから、そこはちゃんとやるけれども、土日は市としてはかまわないということになるのか、でもそんなわけにもいかない。

○委員(北田 朋幸)

大体クラブチームを見ていると、だれかの親が何人かを集めて連れていくというのをよく見ます。

○市長(山田 憲昭)

いろいろな所へ行かなければならないし、でもそういったことで親がやってやれないということになったらいけない。課題ばかりでしたが、とりあえずいろんなことを議論しながら、関係部署とやっていかないと、なかなか方向性は言われれば仕方がないかもしれないけれども、文科省が言うような形で地域が動けるのか、そんな体制がとれるのかということです。ほかに何かありますか。よろしいですか。

○委員

はい。

◎協議事項

○市長(山田 憲昭)

では次に、協議事項（２）「公民館のコミュニティセンターへの移行に伴う社会教育の在り方について」であります。事務局より説明をお願いいたします。

○生涯学習課長(北嶋 篤)

(資料にて説明)

◎意見交換

○市長(山田 憲昭)

では２番目の課題につきまして、また安川委員さんからお願いします。

○委員(安川 薫)

先ほどの部活動のことを考えたあとで、このテーマについてまた改めて考えたということで、部活動のことがどうしても抜けなくて、関連してしまう内容になるのですけれども、例えばこのコミュニティセンターに地域人材、いわゆる教室とか講座とかはすでにあると思いますが、その枠を増やすことで、そこに例えば部活動への入部を希望しなかった中学生の子どもたちが、気軽に参加する。あるいはボランティア登録といったことを形態化して、地域の困りごと、例えば冬の時期ですと、除雪をして欲しいという家庭も結構たくさんあると思います。そういう時のお手伝いができるというふうに、部活動以外の選択肢が増える場になるのかなということを想像しました。子どもだけではないですけれども、特に思春期の子どもたちにとっては、おそらくボランティア活動に参加するということが、自分が必要とされている存在なんだというような自己有用感にも繋がります。世の中のニーズというのは日々変化しているので、そんな中で大人になってからコミュニティの組織に入っていくだけではなく、若いうちから、社会教育を通して、地域に学び、地域の支えに自分になるという、ウィンウィンの環境を構築するということで、これからのまちづくりがスムーズに今後行われていくのではないかなと思いました。以上です。

○市長(山田 憲昭)

ありがとうございました。それでは小寺委員お願いします。

○委員(小寺 正彦)

私は、地域コミュニティ組織、これはいいことだとまず思いました。公民館活動で今現在やっているのが、コロナで少し中止もありますけれども、運動会とか文化祭とか、そして各種教育関係の講座、いろいろやっております。この事業については、公民館活動でもできますし、コミュニティ組織でもできますけれども、一番思ったのは、どうしても福祉関係が今の公民館ではなかなかできない。横の繋がり等においては、公民館関係と福祉関係は繋がりがほとんどないし、何もやっていないということが多いと思います。子どもの見守り、それから年配者の見守り、それらも含めてコミュニティ組織でできるように持っていきたいと思った次第です。そしてもう一つは、生涯学習はたくさんあるのですが、どうしても部屋の問題とか、または時間数の問題とかが、かぶってしまって、全部できないということも多々あると聞いております。コミュニティセンターになったら、それらの問題の調整ももっと上手くいくのではないかと思ったわけでございますけれども、それらも含めて、また皆さんからいろいろ情報を教えていただければと思いました。以上です。

○市長(山田 憲昭)

ありがとうございました。それでは北田委員お願いします。

○委員(北田 朋幸)

公民館とコミュニティセンターをこうして比べて、ほとんど変わらないのだろうなという気がしていますが、コミュニティセンターにおいては、会長、センター長、センター職員がいて、これはまたややこしい話なのではないかと思っています。建物のセンター長がいて、会長を別に住民から選ぶとすると、センター長が本当にいるのだろうか、また、会長がいなくても、センター長でいいのではないか。方向性が違ってくると、大変もめやすいのではないかと思っています。コミュニティセンターでいいとは思いますが、白山市がこれ

だけ広いと、組織には様々な人間関係があるので、難しそうだなとは思いますが、いずれにしてもこれはやっていくべきことですが、首長部局と教育委員会の両方で見るということが、本当はどちらか一つにまとめた方がいいような気がします。まだ何かコミュニティセンターを完全に掴み切っていないです。

○市長(山田 憲昭)

ありがとうございました。それでは竹内教育長職務代理者をお願いします。

○教育長職務代理者(竹内 千恵子)

私も少し勉強不足なのかもしれませんが、公民館は教育委員会にあるので、社会教育的なものが中心なのだろうと。それからコミュニティセンターというのは、教育に限定されない、レクリエーション的なものとか、防災とか、そういうものも含んだ大きな組織なのだろうなというような、ざっくりとしたとらえ方です。ただ先ほど説明があったところで、質問なのですが、公民館のコミュニティセンターに移行後、生涯学習活動が縮小というのは、これはどういう点で縮小されることが予想されるのですか。

○生涯学習課長(北嶋 篤)

縮小というのは見た目というか感覚的なものだとは思いますが、今、生涯学習課の事業で、多くの市民の方に参加いただいているのは、間違いなく公民館活動の中の社会教育ということになります。それが市長部局へいったときに、残った生涯学習、市全体のものは、少し薄くなってくるのかなという意味で、縮小が懸念されると説明いたしました。だから、今現在の生涯学習の多くを担ってくれているところが公民館ということです。

○教育長職務代理者(竹内 千恵子)

そうすると、コミュニティセンターの中に、公民館の活動も入るということですか。

○生涯学習課長（北嶋 篤）

連携はします。

○教育長職務代理人（竹内 千恵子）

連携はするけれども、それぞれ所管が違うので、難しくなるんですね。そうするとどうなんでしょう、そのコミュニティセンターの中身がよくわからなくて、公民館には館長さんと主事と事務員の方、基本的に3人がいらっしゃる。コミュニティセンターはどんな形になるのかということが、ここには全く書いていないので、どういう布陣になるのでしょうか。

○生涯学習課長（北嶋 篤）

簡単に言うと、コミュニティセンターもセンター長と職員です。結局、公民館長と、公民館主事みたいな形をとります。そのほかに、コミュニティ組織というものもありまして、そこに会長があつたり副会長があつたり、役員さんがおられて、それが地域を運営していくという形です。センター長というのは、事務局長も兼ねたような形で、組織に関わってくる。もう少し、いろいろなパターンがあると思いますが、例えば、防災部とか、環境部とかがある中で、生涯学習部というのがあれば、そこが公民館の役割をなすという形でイメージしてもらえばいいかなと思います。

○教育長職務代理人（竹内 千恵子）

そういうたくさんの方のことを、どれぐらいの職員でできるのかなということもあるし、かなりその地区によって、いろいろな公民館活動をしていますよね。公民館が、防災のような訓練をしているところもあれば、娯楽的なスポーツをやっているところとか、あるいは文化的な文化祭をやっている公民館とかがあって、なかなか一つになるのは難しいのではないのでしょうか。とにかく、縦割りにはないで、きちんと一つのコミュニティセンターとして力を持って、市民、地域の方の福祉に役立てればいいかなと思います。文化的なものも、災害的なものも、あまり縦割りで寄せ集めにならないようになっていい。あと、今までやってきたところを生かして、公民館が防災中心

にやってきたところが、防災をメインにするコミュニティセンターとか、何かそれぞれのところが特色があると、またこれが面白いかなということは少し思っています。以上です。

○市長(山田 憲昭)

ありがとうございました。それでは教育長お願いします。

○教育長(田村 敏和)

コミュニティセンターに関しては、いろいろなお考えやお気持ちもあるかなと思います。我々教育委員会としては、いわゆる公民館がコミュニティセンターに変わるといふか、拡充されるという考え方をしています。公民館の社会教育活動だけではなく、地域課題としてのいろいろなことも含めて、コミュニティセンターとして、地域に根差した活動をしていただくということで、その際に、教育委員会として今までの社会教育で担っていただいた公民館の活動をコミュニティセンター化された時にどう繋いでいけるのかというところで、私は逆に、いろいろな活動が増えていって、社会教育のエリアも広くなるのではないかなと思っています。先ほど安川委員が少しお話しされましたが、部活動の地域移行に関しても、子どもたちが、いわゆる地域のコミュニティセンターで行う社会教育という中に参加するということも出てくる可能性もあろうかなということを思っています。そういう意味で、コミュニティセンター化することで、公民館が拡充されていき、より活動の幅が広がっていき、子どもにとっても、地域住民にとっても、いろいろな学ぶ場や活動する場も増えるのだらうかなと思っています。白山市内は非常に広域ですので、活動がいろいろあろうかなと思います。ただ学校に関しては、やっている活動は、ほぼ同じようにさせていただいていますので、学校と地域のコミュニティとの連携ということも必要になってくるということで、コミュニティスクールのモデル校として美川小学校、そして蕪城小学校にやっていただいています。地域の美川公民館をコミュニティ組織としての今モデルとしてやっています。今、その組織の中に学校も入って、コミュニティセンターが動けるような形をとらせていただいています。そうやって、学校教育と社会教育というのをうまくつないで

いければということで、コミュニティセンター化することによって、逆により一層、社会教育が広がっていいのかなということを思っています。以上です。

○市長(山田 憲昭)

この問題は、公民館活動を通じて、主としていろいろなことを提案しながらやってきました。学校の先生、大学の先生の提案も含めていろいろなことをやってきたら、結果として、聞けば聞くほどわからなくなるというような状況が出てきました。コミュニティ化そのものについては、先ほどから少し出ておりますように、公民館活動はどちらかというと、文化的な活動が多いということで、この白山市の公民館活動というのは全国的にも優れているんですね。これはもう文句はないのですが、今後は地域の課題というものに対して、みんなで考えるようなことがあってもいいのではないかと。防災活動というのは、今回8月4日の雨でも、自分たちが経験したことないということの中で、やはり組織が必要だということがわかったと思います。まずは、28の公民館が抱えてやっていけばいいなと思うことの第一番は、防災の委員会を作って、しっかりみんなで支え合うということができていくことが、大事なのではないかと。今、私も公民館を回っている最中ですけども、そこで地域問題として取り上げ、そのことによって、福祉の問題である一人暮らしの人をどう助けるのかとか、いろいろなこと等も含めて見えてくるものが出てくるだろうと。それではその中で、公民館はどうするんだということになると、公民館の機能は残します。公民館の機能は残しながら、今言われていますように、防災組織というのは、今の公民館の中でも、もうどんどんやっている。それをもう少し後押しをする形で、その組織をしっかり整えていくことによって、公民館機能を残しながらコミュニティ化していく。そのことによって、社会教育の部分と、学校教育の部分とをうまく取り入れながらやっていく。そうすると、大きく網羅した形ができ上がる。連携していくということからすると、地域のあり方を、社会教育と学校教育というものをうまく合わせていけるように、組織としてまた再構築して、市長部局と教育委員会等が連携してやるような組織に変えていくべきではないか。そういうふうに理解していかないと、時代

の変化、地域の課題をやはりみんなで考えていこうとするときには、幅広い分野からもできるような形にしておく必要があるのではないか。学校教育は絶対必要なのだから、これが必要だというような仕分けの中で、今後とも地域の困りごとをみんなで考えていくような組織ができる。さらに、公民館は機能としてしっかりやっているのだから、そのいいものはちゃんと残していくという、まずはそういう形でやっていく。そして、防災というものをみんなで考えて、そのことによってみんながその防災の中で連携を取り合うというような形が見えてくると、地域のいろんな課題に、これもいる、あれもいるということが、出てくるのではないかという形なんです。ですから、ものが移行するときに、戸惑いもありますけども、公民館を否定するのではなくて、公民館機能は残しながら、地域の防災としてされている部分を、さらに範囲を広げて活動できるようにした方がいいのではないのかというのは、今、28の公民館に行って話をしているところです。今後、このコミュニティの問題につきましては、議会でも議論になっておりますけども、令和6年度にスタートしようという話があります。ただし、28の公民館全部一斉スタートにはこだわらないと。実は、コロナもあったりして、説明やいろいろなものが進んでいないこともあるので、令和6年度の同時スタートにはこだわらないけれども、防災組織ならみんなが必要とすることは見えているし、やろうという機運がありますから、そんなことができれば、結果として同時スタートもできるのではないかと、併せていろいろな地域課題が、もっともっと進んでいるところがありますので、それはそれとしてやってもらう。町のあり方とか、組織のあり方とか、報酬の問題とか、いろいろな問題がありますけども、まずは地域の課題をどうできるかということに応じて、今いる事務職員の皆さん方の職務が、これだけの人数でいいのか悪いのか、そういうものは必ず出ると思います。その時にはどう増やすのかとか、そういったことが見えてくるのではないかというふうには思っています。形から入ると、非常に難しいもので、まずは、地域課題を解決するために、これだけのことが必要だということも、地域で考えてもらう。それを考えるまず初めは、防災組織であるというふうにしなからしていけば、防災についてはもう、まず自分たちのこととしてやってもらうということですから、自分たちで進んで行っていただきたい。蛇足ですけども、今回も8月4日

にこれだけの災害がありました。13の床上浸水があったりして、そのボランティアも結構来ていただいたのですけれども、もう3日間くらいは、全然どこへ派遣していいか、何をしたいかわからないという状態なんです。やはりよく言われるように、災害が起きて3日間は地域を守らないとできないという、それが今回も出たのですけれども、そういった組織を作りながら、3日間、みんなで地域を守りながら、行政、社会福祉協議会を通じたボランティアを派遣したり、そういったことに繋がりますから、3日間の大切さというものを、もっともっと訴えていかなければならない。人的被害はなかったのですけれども、それはもう自分ごととして、これを教訓にして、防災組織をしっかりと強化する。自分たちのことは自分たちで守るという機運を盛り上げていただきたいなというふうに思います。ですから、あまり難しく最終形を言うのではなくて、まずはできること、自分たちの課題をやっていく中で、組織なり、人的なものなり、いろんなものが見えてくるのではないかと。その中で、組織としてどういうあり方がいいのか、これは令和6年のスタートまでには、結論を出しながらやっていこうということになると思います。今まだ何も決まっていないというのは現実でありますし、そういった組織を作っていく中で、どんなことが思われるのか、そして何が必要だろうかということが出てくるんだと思いますけれども、これだけ地域の連携が希薄化していく中で、防災がキーワードになっていけば、もっともっと地域の連帯感が出てくるのではないかと考えておきまして、これは地域コミュニティのあり方も含めてですけれども、期待をすることは大きいというふうには思います。そのことが、一人暮らしであったり、子どもたちの部活だったり、みんなで考えるということになるのかもしれない。くどいですが、組織のあり方の問題は、少なくとも令和6年のスタート時には明確にしていく必要がある。今4年ですから、今年来年で組織の在り方は決めていくということになると思います。これは法律ではないから、どうしてもしなければいけないということではないのだけれども、せっかくこれだけ公民館活動が進んでいるのならば、もう一歩進めるだけの力があるうちに進んでいく方がいい。遅れてしまうとできないので、やっているときに前に進める方がいいのかなと思います。

今回は、これから先、どう進めていくかという二つの協議でありました。進行形で進んでいるわけでありまして、教育委員会の皆様方も、それぞれの立場でお話をさせていただく中で、より良い姿が見えてくると思いますし、文科省が言っているのでやらなければならないと思うけれども、どこまでできるかという問題はあります。ここは事務的内容としてのフォローができるための準備は怠りなくやっていただいて、以降については、子供たちの気持ちを考えながらやっていければ、あと、ハード、ソフト含めて何が必要なのかということ、よりわかりやすくやっていく中で、予算化できるものはしなければならぬでしょうし、またそういったこともお願いしたいと思います。結論が出ない話が多かったのですが、二つとも重要な問題でありますので、ここは継続的にどう予算化し、体制を整えればいいのかを含めて、教育委員会だけではなく、議論していただければありがたいと思います。

その他はありませんか。————— 本日はありがとうございました。

○教育総務課長（米木 伸一）

それでは皆さまどうもありがとうございました。本日協議いただきました議題につきましては、皆さまからのご意見を参考に検討していきたいと思っております。これを持ちまして、令和4年度第1回白山市総合教育会議を終了いたします。どうもありがとうございました。

閉会 午前11時22分